

我が魔道書は此処に在り

没落貴族と魔道学院

大黒尚人



ファンタジア文庫

3007



没落貴族と
魔道学院

我が魔道書は 此処に在り

大黒尚人
Illustration
白井鋭利



口絵・本文イラスト 白井鋭利

古の昔――

大いなる（いと高き存在）は地上を去り、神代は終わりを告げた。

世界の理は崩れ落ち、取り残されし人々はただ嘆き悲しむ。

無明の闇が地上を覆う、昏き時代。

永久とわに続くと思われた、混沌の世。

されど人々は暗迷の先に、遺されし叡知の断片を見出し、

新たな夜明けを迎える。

それが、魔道。

神の御業みわざに依らずして、至高みくらの御座を目指す人の道。

示されし十の命題。

記されし十の書。

故にその名を『大命十書』。

道は遙けく遠く、果ては未だに見えず。

序章 はじまりの日

冷たい小雨が降り注ぐ昼下がりに、葬儀はしめやかに執り行われた。

真新しい墓碑の前で、神官の唱える祈りが静かに流れていく。

「……(いと高き存在)の祝福を受け、ここにロタール・ド・ロレーヌの肉体は、大地へと還らん」

参列者たちの最前列に立つ、まだ幼い少女。か細いその肩が、びくりと震えた。

ルネ・ド・ロレーヌ——故人の娘であり、今は喪主を務める八歳の少女は、父の墓前で深々とうつむく。

まるで人形のように美しく整った、可憐な面差し。だがその顔は今、抑えられぬ悲しみに硬く強張っていた。

「願わくば皇帝ディートリヒ13世陛下の御名の下、彼の者の御魂が清浄なる空にて安らがるんことを——サダルーサ」

「サダルーサ」

祈りの聖句を繰り返しながら、ルネは人知れず唇を噛みしめる。

やがて葬儀は終わり、参列者は三々五々に帰って行った。

「——ロレーヌ家も終わりだな」

参列者たちの交わす囁き声が、ルネの耳に届いた。その心ない言葉に、少女はピクリと肩を震わせる。

「公爵家の当主ともあろう者が、闇討ちで命を落とすとは。恥知らずな。大命十家の名が、聞いて呆れる」

「家伝の魔道書も、頁の半ばを奪われたと聞きます。手元の半分も、人前に出せない有り様だとか。これでは魔道士としての務めなど、到底果たせぬでしょう」

「何と」

「真ですか？ 大命十書の一冊ですぞ」

「第三書が喪われたというのか」

しばしの沈黙の後、不躰な視線がルネに集まった。身を硬くすくめる。

「加えて残されたのは、まだ幼い娘が一人きりか」

「一族郎党もほとんどが見切りをつけたそうだが、あの娘御はどうやって身を立てるつもりかな？」

「他家から相應しい婿を取るのが、筋ですか。あのような不名誉をなした家に、入ろう

という物好きがいれば、の話ですが」

「いやいや。零落したとはいえ、大命十家の名は小さくあるまい。加えて幼いながらも、あの美貌だ。花の季節ともなれば、引く手数多あまたであろうよ」

「おやおや、まさか貴公にはその手の趣味がおありで？」

「馬鹿を言うな。何にせよ、まだ先の話——」

交わされる言葉に、ルネの小さな胸は痛んだ。目元に手を伸ばし、こみ上げてくる熱いものを懸命にこらえる。

(今はまだ、泣いちゃだめ)

自分自身へと、そう言い聞かせる。

ここで泣いてしまうわけには、そして悲しみに沈むわけにはいかない。

このベルン帝国は、魔道の国だ。貴族とはすなわち魔道士であり、己が家門に伝わる魔道の力で国を守り、支え、その見返りとして様々な特権を享受してきた。

貴族の義務も務めも、子供ながら分かっているつもりだ。だがそれでもなお、父の死をただ嘆き悲しむことができない現状は、少女の心を締めつける。

「……ルネさま」

背後から、聞き慣れた声がかけられる。ルネが振り向くと、同年代の少年が傘を手に立

っていた。

黒い喪服姿で、襟元や袖口からのぞく白い包帯が痛々しい。

「——アルト！」

その姿に驚いたルネは、少年——アルトに駆け寄る。

「だめだよ、ベッドで休んでないと。おケガだつて、まだ治つてないのに」

「おれはルネさまの乳兄ちきょうだい妹で、お付きですから。こんな大事な時に、ルネさまをお一人にはさせられません」

「ほんとに、大丈夫なの？」

「もちろん大丈夫です。書は、ちゃんここに——」

不意にアルトの声が途絶えた。ルネがアルトの体を、両手でぎゅっと抱きしめたのだ。少年の手から、傘が滑り落ちる。

「書のことじゃないの。あなたのことだよ、アルト」

驚きで硬直したアルトに、ルネはそう囁きかけた。

「わたしのせいで、アルトをあんな辛い目にあわせたんだから。だからもう、無理はしないで。お願いだから」

そう告げたルネは、アルトからそっと身を離れた。主あたまから気遣われたアルトは、何とも

言えない神妙な表情で、のろのろと傘を拾い上げる。

「おれが、いますから」

「……………え？」

意を決して、アルトはそう言った。

傘を受け取りながら、その言葉にルネは小首を傾げる。

「おれが、ずっとそばにいますから。お屋形さま——いえ、ご先代さまの代わりに、おれがルネさまを守りますから」

これ以上ないほど真剣に、アルトはそう言った。

騎士の誓いの作法も、その本当の意味も知らない、幼く拙い言葉である。

だが——だからこそ、嘘偽りのないその真情は、ルネの心へと確かに届いた。

「おれが、ルネさまの騎士になりますから」

その言葉は、決して破られることはなかった。

第一章 入学式

1

アルトことアルトウール・レーモンには、朝の大切な務めが二つあった。

一つは、主の身だしなみを整えること。もう一つは、それに先立つアルト自身の身支度である。

「……………よし」

宿の一階、姿見の大鏡に映った自分の姿を確かめる。

黒目黒髪の、鋭く引き締まった精悍な顔立ち。一五歳という年齢以上に、大人びた風貌をしている。鞭のように絞り込まれたしなやかな長身は、ローブ型の制服に包まれており、腰のベルトには短剣を下げていた。

問題ない。

従者の外見は、主の品格を映し出す鏡のようなもの。徒や疎かにはできない。今日のよう
に特別な日ならば、なおさらだ。

うなずいたアルトは、主の部屋がある二階へ向かった。古ぼけた木製の階段が、ミシミシと軋む。

目的の部屋の扉を、そっとノックした。

「そろそろお目覚めの時間です、ルネ様」

「ア、アルト？　ちょよ、ちょっと待ってて」

扉の向こうから、柔らかな少女の声で返事があった。いつも朝寝坊の主には珍しく、今朝はちゃんと目を覚ましたらしい。

感心感心、そうアルトが思った矢先のことである。

どんがらがっしやんずつべったーん！！

——そんなとんでもない音が、主の部屋から響いた。

「ルネ様!？」

血相を変えたアルトは、扉を蹴破る勢いで部屋に飛びこむ。

「あ、あるとお〜」

室内の情景を見て、アルトは言葉を失う。

持ち込んだ旅の荷物から備え付けの調度品まで、ありとあらゆる物品がひっくり返って積み上がり、部屋の真ん中にこんもりとした山を築いていた。

「たーすーけーてー」

彼の主たるルネ・ド・ロレーヌは、その山に埋もれてジタバタともがいていた。あられもない下着姿で。

腰まである亜麻色の髪が白い肌にまとわりつき、緑の瞳は涙をたたえてアルトを見上げていた。いつもの清楚な可憐さが、ありとあらゆる意味で台無しである。

「……で、何がどうなってこの有り様なのです?」

しばしの沈黙の後、アルトは主にそう尋ねる。不気味なほどに、丁寧かつ優しげな語調で。

そんな従者の姿から、ルネは気まずそうに目を逸らす。

「あのね、今日は大事な日だから緊張しちゃって、早く目が覚めちゃったの。だから今日くらいはアルトに頼らずお着替えとか済まそうって思ったんだけど、その、つい、念動の術に失敗しちゃって——」

「ご覧の有り様だと」

「うん。ごめんなさい、かえってアルトの手間になっちゃった」

素直にそう謝るルネに、アルトは小さく笑った。

「構いませんよ。あとは俺にお任せください」

こめかみを軽く揉みほぐしながら、右手の指を鳴らす。
念動系術法の簡易発動。

積み上がった品々の一つ一つが浮き上がると、それぞれのあるべき場所へと戻り、収ま
っていく。

不幸中の幸いと言うべきか、物品の破損は割れた皿の一枚きりだった。あとで宿に弁償
しなければ。

「あ、ありがとうアルト。でも今から私お着替えるから、その間は部屋から出て……っ
てきゃっ?」

最後に、下着姿で恥じらうルネの体がふわりと浮いた。逆さまになっていた椅子をさら
んと立たせ、そこに座らせる。

「もう時間ありません。お召し替えの介添えをいたします。失礼」

「ちょ、ちよっと待って!」

焦る主の抗議を、アルトはサラリと無視する。仕分けした衣類の中から目当てのものを
見繕い、足早にルネの下へと向かった。

「さあ、どうぞ」

「……ううう」



顔を赤くして唸^{うな}っていたルネだが、やがて観念したように、アルトの差し出した衣服へと袖を通していく。

白いシャツに、コルセット型の胴衣とチェックのスカート。赤いタイを蝶結びに締め、丈長のローブを羽織った。男女の差異はあるが、アルトのものと同じ意匠の服である。ベルン帝国の最高学府である、ベルン帝立魔道学院の制服だった。

「よくお似合いですよ」

「うん、ありがとう」

不満げに口を尖^{とが}らせていたルネも、アルトから渡された手鏡で自分の姿を確かめると、たちまち機嫌を直す。

今日、アルトとルネの二人は、新人生として魔道学院に入学するのだ。

「あと髪もお願いね」

「心得ています」

うなずいたアルトは、手桶^{ておけ}を拾い上げて軽く叩^{たた}いた。たちまち虚空^{こくう}から温^{ぬる}めのお湯が湧き出て、手桶^{ておけ}を満たす。

さらにブラシや櫛^{くし}を注意しながら、ルネの背後に回った。

「せっかくの入学式ですが、どうしますか？」

「うーん、いつも通りで。そのまま自然に流してちょうだい」

「了解」

短く答えながらアルトは、ルネの腰まである艶^{つや}やかな髪の一房を手取る。

ルネの髪の手入れは、魔道の術法を用いずアルト自身の手で行う。それが、二人の間ルールだった。

〈跳ねる仔馬^{こうま}〉亭は、帝都ベルンの下町に店を構える小さな宿屋だ。一階は食堂になっており、早朝の今は旅立つ客でごった返している。

「なあなあ、大将」

カウンター席に陣取った常連の旅商人が、厨房^{ちゅうぼう}の店主にそう話しかける。大柄な髭面^{ひげづら}の店主は、迷惑そうに振り向いた。

「何だい、この忙しい時に？」

「あれだよ、あの二人」

そう言いながら、旅商人は食堂の片隅の席を見やった。制服姿の少女が二人、黙々と朝食を摂^とっている。

言わずと知れた、アルトとルネだ。

「魔道学院の学生と言えば、貴族の若様方と相場が決まってる。いつの間に、そんな上客を捕まえたんだ？」

「知るかよ。貴族様だろうが皇族様だろうが、宿代を払ってくればお客様だ」

宿の店主は、そう鼻を鳴らす。

ちなみにアルトたちの摂っている朝食は、堅い黒パンにチーズの一欠片、豆と野菜のスープといった簡素な献立だ。他の客に出されている物と変わらず、貴族の食卓に並ぶような食事には見えない。

「……最近では、魔道学院にも平民の学生が増えてきたらしいからなあ。その口かねえ？」

「いいから、客同士の妙な勘ぐり合いは止してくれ」

そう店主が釘を刺した時だった。

一台の馬車が、へ跳ねる仔馬亭の前に停まった。厨房の窓から確認し、店主は驚く。ただの馬車ではない。

各所を金銀の細工で飾り立てられた、瀟洒な車体。それを引くのは二頭の一角獣——額に一本の角を持つ、馬の姿の幻獣である。

貴族御用達の箱馬車だ。

「大将、あれってやつぱり……」

「ああ、だろうな」

店主と行商人は、揃ってアルトとルネを見やった。

一角獣の箱馬車に驚いたのは、ルネも同じだった。

「ねえアルト、あの馬車って……」

大きな緑の目をパチクリと瞬かせ、対面のアルトにそう尋ねる。

「貴族向けの貸馬車ですよ。学院までの足として、手配しておきました」

ごくあつさりとして、アルトは言った。何ともご丁寧なことに、貸馬車の車体にはロレーヌ公爵家の家紋まで描かれている。

「ええっ？ ここから学院までって、歩いて行ける距離なのに」

「体面というものがありません。仮にもロレーヌ家の後継者が歩いて登校するなど、面子が立ちません。恥をかきませよ」

「で、でも、ちょっと贅沢すぎないかな？ 私たち、あまりお金持っていないだし」

「心配ご無用、自分のへそくりから用立てました。それに金というものは、使うべき時に使ってこそ意味があるものです」

心配げなルネに対し、アルトはあくまで自信満々だった。そのままズイットと、テーブル

の上に身を乗り出す。

「帝國本領貴族の名門にして、大命十家の一角たるロレーヌ公爵家。その遺児が魔道学院の門戸をくぐる、これすなわち御家再興の第一歩です。なればこそ『ルネ・ド・ロレーヌここにあり!』と、高らかに名乗りをあげませんと」

「わ、分かった……ような気がする」

アルトの圧力に押されて、ルネはコクコクとうなずいた。

「お分かり頂けまして、なによりです。じゃあ俺は宿の勘定を済ませてきますから、ルネ様もお支度を」

身軽に立ち上がったアルトは、宿の主人の所に早足で向かった。残されたルネは、口元を拭いながら、宿の戸口に停まった馬車を見やる。

庶民の住まう下町の通りに、貴族仕立ての箱馬車という組み合わせは、やはり目立つ。まだ朝早いのにまじまじと馬車を見つめる野次馬が続出し、ちよつとした人ばかりになっていた。

まだ若い馬車の御者も、居心地悪そうにこちらを見ている。

「いいのかなあ……」

カラカラと車輪の立てる音と共に、箱馬車の車体が小気味よく揺れる。石畳の広い街路を、馬車は軽快に進んでいた。

車窓から見える帝都ベルンの街並みを、ルネは飽きもせず眺める。

「私たち、帰ってきたんだね。この帝都に」

「はい、帰って参りました」

ルネのつぶやきに、アルトはうなずく。

季節は春。ベルンは花の盛りを迎えており、行き交う人々の表情も明るく活気に満ちていた。

色とりどりの花々の中で、ひときわ目立つのは藤の花だ。そこかしこで街路樹や建物につるを絡ませ、淡い紫の花の房を咲かせている。

ベルン帝国初代皇帝デイトリヒ一世がこよなく愛し、都を飾り立てた藤の花。七年ぶりに帝都の名物を見たルネの胸に、郷愁の思いが湧き上がってきた。

「あれ、ここってブリューデ通りだよな? ああ角のお菓子屋さん、お店を閉めちゃったんだ」

「本当だ。あそこの焼き菓子とは絶品だったのに。残念です」

「もう、アルトったら甘い物に目がないんだから」

本気で無念そうなアルトを見て、ルネはクスクスと笑う。

と、御者が馬車の小窓越しに声をかけてきた。

「お二方、帝都はお久しぶりですか？」

「ええ、七年ぶり。変わっていないように変わっているのね、この都は」

そう答えたルネが、制服の胸元をそつと両手で押さえた。若々しい膨らみが、控えめに存在を主張する。

「御者さんはどうなの？　こういうお商売だし、ベルン暮らしは長いのかしら？」

「それはもう、帝都生まれの帝都育ち。吹けば飛ぶような木っ端貴族の、家を継ぐ見込みのない三男坊でございます」

おどけた口調で、御者はそう言った。

「最近、貴族と言っても家計の内実は火の車、という家も多いですから。社交に馬車は必要だが、馬車を維持するにも馬鹿にならない金がかかる、ならいつそ必要な時だけ馬車を借れば良い——そう考える方々も多くて、こういう商売でも何とか飯を食っていています」

「……ローレーヌ家の場合、火の車なんて生やさしいものじゃないけどね。家そのものが焼け落ちちゃったみたいなものだし」

「お勞しや、ルネ様」

物憂げにルネはつぶやき、アルトも目頭を押さえた。一変した馬車の空気に、御者が慌てる。

「こ、これは失礼いたしました。ええと、御当家に含みがあるわけでは、決して——」

「分かってます。それにもう、終わったことだから」

むしろ自分自身に言い聞かせるように、ルネは言った。

「ローレーヌ家はもう潰れてて、私たちはそこ、からやり直さないといけない。そうでしょう、アルト」

「無論です。お供させて頂きますよ」

2

ベルン帝国の帝都ベルンは『七つの丘の都』として知られている。帝立魔道学院はその七丘の一つ、市街の北東一帯を占める梟ヶ丘に建てられていた。

丘の全周をぐるりと巡る高い塀は、まるで城壁のようにそそり立ち、校内と校外の空間を峻別していた。開放された校門前の広場には、次々と馬車が押し寄せていて、大変な混雑になっている。

誇らしげに家紋を掲げた箱馬車から降りる新人生は、いずれも名のある貴族名家の子弟と、その従者たち。とはいえ彼らに交じって、单身徒歩で校門をくぐる下級貴族や平民出身の学生も、ちらほら見えるのだが。

「この人たちと、これから一緒に学ぶんだね」

馬車の小窓越しに新人生の姿を見て、ルネは言った。

皇帝のお膝元たる帝国本領のみならず、西部領、東部領、島嶼領——東西一〇〇〇マイル（約一六〇九km）南北八五〇マイル（約一三六八km）に及ぶ、広大な帝国全土から集められた俊英たちである。

「そのこの扉の脇に寄せて欲しいんだが」

「了解しました」

アルトの指示に従い、御者は巧みな手綱捌きで馬車を停めた。そのまま御者台から下りて馬車の脇に踏み台を置き、さらに馬車の戸を開く。

貴族相手の貸馬車を営んでいるだけあって、動作の一つ一つが作法に則っており、非の打ち所がない。

だから周囲から集まった不躰な視線の責任は、彼にはなかった。

（あの馬車の紋章は——ロレーヌ家？）

（潰れた家の子が、今さら見栄を張って）
（みっともないな）

ひそひそと交わされる囁きの中、まずアルトが平然と、次いで手を取られたルネがきよろきよる周囲を見回しながら、それぞれ馬車から降りる。

「……ねえアルト、何かすごく悪目立ちしてるみたいだけど。やっぱり歩いて来た方が良かったんじゃないかなあ」

「何を仰いますやら」

すっかり気圧されているルネの姿に、アルトはため息をついた。

「ロレーヌ家再興の大事を成そうという身で情けない。ほら、ちゃんと胸を張って、堂々となさいませ」

「それはそうなんだけど、まずは身の丈に合った一歩を踏み出すのも大事だと思うの」

不安がる主と、それを叱咤する従者。そんな主従のやり取りを横目で見やりながら、御者は踏み台を仕舞い、御者台に戻る。

「その、自分のような者が言うのも何ですが、頑張ってくださいよ。開く道があるのならば、きつと道は開けるはずですし」

「……ありがとう。分かってはいるんだけどね」

すっかり同情されたルネは、何とも言えない表情になった。

「ここまでご苦労様」

「いえいえ。今後とも御用の向きがあれば、どうぞご虫貞に」

そう言い残して、一角獣の箱馬車は走り去った。残されたルネのまだ強張った手を、アルトは強く優しく握る。

「アルト——？」

「大丈夫ですよ、ルネ様。俺がいつでも側にいますから。それでも、御不安ですか？」

「……………ぶ」

大真面目にそんなことを言うアルトに、ルネは思わず小さく吹き出した。

「ルネ様？」

「大丈夫よ、アルト。……ありがとう」

不安が消えたわけではない。弱気の虫も、まだ残っている。

だがそれでも、ルネは笑った。笑ってみせた。

「じゃあ、行きましょう」

「了解」

二人揃って校門へと一歩踏み出した、その時だった。

「おや、あれは？」

校門へと向かう新入生の列の流れが止まり、ちょっととした人ばかりになっていた。見れば二人の新入生がにらみ合っており、他の新入生はその周囲を遠巻きにしている。

対峙する新入生の、片方は男で片方は女。共に貴族の出入りしく、背後に各々の従者を従えていた。

「——つまり、詫びるつもりはないということだな」

中肉中背の男子学生が、低い声でそう言った。対する子供のようには小柄な女学生は、その剣幕を鼻で笑う。

「当然です。肩が当たっただけの当たらないだの、そんな難癖には付き合いませんわ。全く、これですから磯臭いノーフォークの殿方は」

「言ったな、鼻持ちならないリラダンの女が」

そのやり取りを聞いて、ルネは驚いた。

「リラダンって、あのリラダン家かな？」

「はい。侯爵位を持つ西部領貴族で、錬金術法の大家。年格好からして、本家の一人娘のベアトリス・ド・リラダン様に間違いないでしょう。ルネ様と同じく、大命十家の後継者です」

そう説明しながら、アルトは女学生——ベアトリスの様子をうかがう。

練り絹のように白い肌と、豪華な金髪こがねかみの巻き毛。まだ幼さの残る天使のような愛らしい顔には、女王然とした傲慢な笑みを浮かべていた。

「相手は、島嶼領のノーフォーク伯爵の係累のようですね。確かりラダン家とは、海を挟んで色々採めていたはず」

「海峡航路の権益だったっけ？ 色々色々と難しいのは分かるけど、それでケンカになるなんて」

「よくある話ですよ」

ベルン帝国は大国だが、決して一枚岩の国体ではない。皇帝の下で数多くの貴族諸侯が領地を保有しており、領内の土地と人民を支配しているのだ。

いわゆる封建制度である。

そのため互いの領地や利権を巡って、帝国内の貴族同士が対立や紛争を起こすことも、それほど珍しくはない。

「今ならまだ、言葉の綾あやで済ませて差し上げてもよろしくてよ。そちらにその気があれば、ですけど」

「言わせておけば——**頭かぶわれ、出いでよ**」

ベアトリスの挑発に、ノーフォーク何某なにがしは浅黒い顔を真っ赤にして叫んだ。掲げた右手の先で空間が揺らぎ、捻じ曲がり、物品として現出する。

それは、一冊の本だった。

重厚な革の装丁。開かれた羊皮紙べしの頁では、複雑な書体で記述された魔道の秘文字が、自ら光を発して明滅している。

「——魔道書を!？」

「抜いたぞ!」

その途端、周囲に緊張が走る。

魔道書。

その言葉が意味するものは、二つある。

広義では論文や学術書、教本といったような、魔道についての知識が書き記された書物全般のこと。狭義では魔道士の家系に代々伝えられ、その家の秘技秘術を記した『力ある書』。

魔道士は『力ある書』と契約を結び、記述された術法を行使することで、超常の力を振るうのだ。故に人前で魔道士が自身の魔道書を手にするということは、それだけ本気ということである。

今までベアトリスの背後に控えていた銀髪の従者が、主を庇^{かば}つて前に出た。

「お嬢様、ここはこのエステル・オクレールにお任せください」

艶のあるハスキーな声。男物の制服を着てはいるが、長身の娘だった。中性的で硬質な顔立ちの、こちらも中々の美形である。

「無用ですわ。下がっていないさい、エステル」

「ですが——」

「あなたは自分の主が、この程度の挑戦から逃げるような臆病者と思ってるのかしら——

頭われよ」

そう言つて従者のエステルを退けたベアトリスも、自身の『力ある書』を呼び出した。

表紙を飾る重厚かつ華麗な幾何学紋様^{かかく}は、ため息が出るほど美しく、それ自身が一個の芸術品として完成している。

「あれが、リラダン家の魔道書——」

「大命十書^{だめいじゅうしよ}の一つ、第六書か」

野次馬の新生入生たちが、そろつて賛嘆の声を上げた。

「くっ……」

明らかな格の差を見せつけられ、ノーフォークは目に見えてたじろいだ。敵手のその有

り様を見て、ベアトリスは華麗に笑う。

「どういたしましたの？ 今のうちに頭を下げるのでしたら、見逃して差し上げてもよろしくですよ」

「ぬ、吐かせ！ そちらこそ今さら、吐いた唾は飲めないぞ！」

「まあ、品のないこと」

一触即発の空気に、ルネは焦^{あせ}つた。

「ど、どうしようアルト？ 止めないと——」

「止めると仰るなら止めますが、それでよろしいのですか？」

「——」

そんなやり取りを交わすルネとアルトを、ベアトリスは振り向いた。その途端、状況が動き出す。

「どこを見ている——来れ、奔れ、眩き光」

ノーフォークは魔道書の頁^{ぺい}を繰り、目当ての一節を読み上げた。

術法詠唱。

魔道書に記述された術法が、魔道士の魔力と詠唱によって具現化し、その意のままに現実を変容させる。

虚空に次々と生じた光の矢が、ベアトリス目がけて一斉に放たれた。

自身の魔力を矢として投射する、基礎的な攻撃術法だ。三節の詠唱での五連打は、まず一流と言って良い。だが――

「――阻め」

ベアトリスのただ一言で、その全てが碎けた。

「なに!？」

驚くノーフォークだが、もはや彼には態勢を立て直す暇さえ残されていない。

「――縛れ」

またもや一言。

ベアトリスのそのたった一言で、ノーフォークの全身が棒のように伸びて硬直した。そのまま横転し、地面に転がる。

防御術法と拘束術法。共に基礎中の基礎と言える術法だが、ここまで使いこなせる者は希だろう。魔道士の技量も魔道書の格も、共に計り知れない。

「若!」

血相を変えたノーフォークの従者が、動けない主に取りすがる。

「これで、よろしいのですか?」

「ええ、そろそろ時間切れでしょう!」

従者のエステル問いに答えながら、ベアトリスは校門を見やる。と、彼女の言葉通り、校門の向こうから数名の上級生が現れた。新入生と同じ制服姿だが、タイの色だけは赤ではなく黄色い。

帝立魔道学院は五年制であり、各学年ごとに制服のタイの色を変えているのだ。黄色のタイは、三年生のものである。

「入学式前に、それも校外で何をしている!？」

「大したことはありませんわ、先輩方。新入生同士で、ちょっとした腕試しをしただけですのよ」

そうぬけぬけと言うなり、ベアトリスはパチリと指を鳴らす。たちまち拘束術法が解除され、解放されたノーフォークは激しく喘いだ。

すぐに三年生たちが駆け寄り、様子を確かめている。

「この程度、よくあることでしょに。それよりも――あなたですわ、あなた」

ベアトリスの目が、アルトに留まった。

「あなた先ほど、聞き捨てならないことを仰ってませんでした? 止めろと言われれば止める、とか?」

「そ、それは……」

その言葉で青くなつたのは、ルネの方だった。彼女を無視してベアトリスは、アルトに詰め寄る。

「まさか本気で、わたくしを止めることができるとは思っておりませんわよね？ 見ての通り、わたくしの術は大抵の騎士の剣より速いですわよ」

問い詰めるような、あるいは鬨るような言葉に、アルトは動じなかった。

「そう言われましても、主から命じられた時点で『できるかできないか』ではなく、『やるかやらないか』の話ですし。従者というのは、そういうものではないでしょうか？」

「……………」

一瞬だけ考えこんだベアトリスだったが、すぐつまらなそうに鼻を鳴らした。

「呆れましたわ。そういうのは忠義ではなく、『愚忠』と言いますのよ」

続いてその視線は、オロオロと立ち尽くすルネに向けられる。

「あなた、ロレーヌ公爵家の跡継ぎですわよね。お名前は、ルネ・ド・ロレーヌ様でよろしかったかしら？」

「は、はい。お初にお目にかかります、ベアトリス・ド・リラダン様」

「いくらロレーヌ家が没落したとは言え、この程度の従者を抱えていたのでは、大命十家

の名が泣きますわよ」

そう言い捨てて、ベアトリスは踵を返した。

すでに三年生による処置が終わっていたらしく、ノーフォークもふらつきながら立ち上がっている。

「では、お先に」

従者のエステルを従えて、ベアトリスが校門を潜った。他の新入生も、それに倣う。取り残されたルネは、深く深くため息をついた。

「いやはや、大変な方でしたね」

「ごめんなさい、アルト。私の不用意な一言のせいで」

「構いませんよ。それより急がないと、本当に入学式に遅れてしまいます」

ベルン帝立魔道学院の入学式は、梟ヶ丘の頂に建てられた大講堂で執り行われる。アルトとルネが大講堂に着いた時、すでに新入生の大半は席に着いていた。

ちなみに新入生の中でも平民出身の学生たちは、講堂の席の後列に並んでいる。そう席を指定されたわけではなく、ごく自然な身分意識の結果だった。

「ええと、空いてる席は……ここにしましょう」

「分かりました」

二人が座ったのは、『平民席』の一つ前の列の右端である。なるべく目立ちたくないと
いう判断だが、それでも時折、不躰な視線が飛んで来るのは避けられない。

「ほう、あれがロレーヌ家の跡取りか」

「さつそく校門前で、リラダン家の娘と一悶着あつたらしいわよ」

「大命十家同士で角突き合わせたのか。見物だな」

「残酷ですね。同じ十家なのに、今や絵に描いたような没落貴族だ」

そんな囁き声まで交わされていた。

「うふう——」

反射的に縮こまりかけたルネだが、先ほどのアルトの言葉を思い出し、背筋をピンと伸
ばして胸を張る。

「その意気ですよ、ルネ様。と、そろそろ式も始まるようですね」

講堂の壇上に、司会役の女学生が上がった。その姿を見て、アルトの目が細まる。
知った顔だったのだ。

「あの方は——」

波打つ赤毛の髪を肩まで伸ばして銀縁の丸眼鏡をかけた、知的で柔和な面差し的美人

だった。制服のタイの色は四年生の白。さらに胸元を飾る梟の意匠のメダルは、学年首
席の証である。

「あれって、テレジア姉様だよね？」

「はい、そのようです」

テレジア・フォン・クラナツハ。東部領貴族クラナツハ伯爵家の長女で、ルネの母方の
従姉である。早逝したルネの母はクラナツハ家から嫁いできており、テレジアの父である
現当主の妹なのだ。

「そっかあ、四年生の首席なんだ。やっぱり凄いな、テレジア姉様」
今となつては数少ない身内の姿を見て、ルネの顔はほころぶ。

「ねえ、ここから手を振ったら、姉様に気付いてもらえるかな？」

「止めてください恥ずかしい。だいたい、テレジア様に迷惑でしょう」

「だよー」

そんな従妹と従者のやり取りを知ってか知らずか、壇上のテレジアは朗々と声を上げた。
「みなさん、静粛に。これより大陸暦一四九一年度の、ベルン帝立魔道学院入学式を執り
行います」

よく通る美声に、今までざわめいていた新入生も居住まいを止す。

「ではまず、学長より式辞をお願いします」

「あー、はいはい」

テレビシアにうながされて、枯れ木のように瘦せた初老の男性が壇上に上がり、中央の演台についた。

「えー、私が本学の学長、オーギュスト・ラ・ヴァレットである。えー、君たち新入生はこれより五年間を本学で過ごすことになるのだが、えー、まずは本学の学生としての自覚を持って——」

演台の学長は、うつむいた姿勢のままそう語り出した。低くボソボソとした声は掠れ気味で、かなり聞き取りにくい。

「——そう、本学の学生としての自覚、これは非常に大事なのだ。聞けば新入生の中には早速、決闘^{まが}紛いの騒動を起こした者がいるそうではないかね。ええ、困るのだよそういうのは。とてもとても困るのだ——」

段々と、式辞なのか愚痴なのかよく分からなくなってきた。

「ちょっと意外だね。魔法学院の学長っていうからには、何かこう、いかにもな大魔道士っぽい人が出てくると思ってたけど」

「式辞の最中ですよ、お静かに」

ルネのつぶやきをいさめたアルトだが、内心では完全に同意していた。

入学式は、滞りなく進行していった。

ヴァレット学長の式辞の後は、来賓の挨拶に新生代表の誓言と続く。そのどれもが定型のかつ凡庸な代物で、聴衆の感性を摩耗させること甚だしい。

(ま、入学式であり奇抜なパフォーマンスをされても困るか)

内心であくびを噛み殺しつつ、アルトはそう評した。無論、外見にはおくびにも出さず、謹厳な物腰を取り繕っている。

「では続いて、学生総代の祝辞を」

「心得た」

テレビシアの司会で、新たな学生が壇上に上がる。その途端、弛緩^{しかん}しかけた大講堂の空気が一変した。

「ようこそ、新入生諸君。私はアンゼラム・フォン・ロートリンゲン。学生総代などというものをやっている」

堂々たる偉丈夫^{いじょうぶ}だった。

六フイート半(約一九八cm)を超える長身で、彫りの深い端正な顔立ちと均整の取れた

屈強な体格は、まるで古代の神像のよう。銅を思わせる灰白色の髪は短く刈り込まれ、制服のタイの色は、最上級生たる五年生の青である。

「まずは先達として君たちに聞きたい——魔道とは、何か？」

突然の問いかけに、講堂内がざわめいた。戸惑いながら顔を見合わせ合う新入生たちだが、答えようとする者はいない。

その反応を見て、アンゼルスはふっと表情を緩める。これまた人懐っこい、何とも良い笑顔だった。

「まあ、急に聞いかけられては困るか。ではクラナツハくん、君はどう思うかね？ 魔道とは、魔道の真髄とは何か？」

「えっ、私ですか？」

急に話を振られて、テレジアは小首を傾げた。形の良い眉をひそめつつ、言葉を選ぶ。

「そうですね——月並みですが、知恵、叡智、真理。そういったものでしょうか」

「うむ。模範的かつ優等生的な回答をありがとう」

「面白くない答えで申し訳ありませんでした」

大真面目なアンゼルスの物言いに、テレジアは拗ねたように唇を尖らせた。漫談じみたやり取りを見て、新入生たちの各所から好意的なざわめきが起こる。

「もう、テレジア姉様ったら」

口元を押さえたルネが、クスクスと上品に笑った。

「さて、諸君らの先輩はこう宣っておられるわけだが、それに対して我こそは——と持論を持ち出す活きの良い者はいるかね？」

「では、わたくしが」

アンゼルスの呼びかけに応えて、新入生の列の中から金髪巻き毛の小柄な少女が立ち上がる。

「君は確か、ベアトリス・ド・リラダンくんか。先ほど一騒動起こしたという。うむ、元気があって大変よろしい」

大仰かつ鷹揚に、学生総代はうなずいた。

「ではリラダンくん、君にとっての魔道とは何かな？」

「それは、伝統ですわ」

小さな薄い胸に手を当て、ベアトリスは堂々と答える。

「わたくしたち貴族にとつて、魔道とは家門そのもの。父祖から伝えられ、途絶えることなく連綿と受け継がれてきた秘術なのですから。それを学び、修め、より高みを目指す。それがわたくしにとつての魔道ですの。違いまして、先輩？」

「いや、何一つ間違っていない。歴史の浅い新興貴族の出身で、なおかつ養子の身である私としては、少々忸怩たる思いがあるがね」

「まあ」

クスリと笑ったベアトリスが、席に着く。

「さて、伝統という観点から魔道を見た場合、その象徴は魔道書だろうな——**顕われよ**」

アンゼラムは自らの魔道書と呼び出し、手に取った。

自ら名乗った『新興貴族の養子』という出自に相応しい、ごく平凡な格の書に見えた。

「言うまでもないことだが魔道士にとって、先祖から受け継いだ魔道書に己の成した探求の成果を書き加え、そして子孫へと伝えることこそ最大の目標となる。魔道の家に生まれた者として、それが当然の有り様だ」

「……………」

自分でも気づかないうちに、ルネは唇を噛んでいた。

魔道士として、あるいは貴族として『言うまでもない』『当然の』こと。だがそれを持たぬ者、そうではない者もいるのだ。

「知恵に伝統。できればもう一つくらい、独自の意見を聞いてみたい。誰かいないかな？」

大講堂のあちこちで、ざわめきが起こった。隣同士で議論を始める新入生たちが、続出して

「これっってもう、祝辞じゃありませんよね」

「先生方、止めなくていいのかなあ？」

そうつぶやいたルネが、ふとアルトの横顔を見やる。

「ねえ、アルトにとつての魔道って何かな？」

「俺の、ですか——」

あるじ主の問いに、ふとアルトは考えこんだ。

ロレーヌ公爵家に代々仕えてきた陪臣の家に生まれ、幼い頃から魔道を学んできた。主家が健在な時も、没落した後も。それがなぜかと問われれば——

「俺にとつての魔道は、『力』ですわね」

「——その君!!」

いきなりの大音声だいおんせいが響いた。壇上のアンゼラムが、ピシリとアルトを指し示す。

「お、俺ですか？」

「ロレーヌ家の従者、アルトウール・レーモンくんだね。今の言葉を、もう一度だけ繰り返してもらいたい」

「は、はあ……」

突然の不意討ちにアルトは驚き、混乱する。

確かにロレーヌ家は色々な意味で有名な家だ。その後継者が今年の新入生の中にいることを、学生総代が知っていてもおかしくない。だが従者である自分の顔や名まで覚えているとは思わなかった。

若干の違和感を覚えながら、アルトは答える。

「ええっと……俺にとつての魔道は力、ですか？」

「うむ、ありがとう。そう、力だ。力なのだ」

その返答に、アンゼルムは何度もうなづく。

「私もまた、魔道とは力だと考えている。(へいと高き存在^も)が地上を去り、神代^{かみよ}が終わって幾千年。人は魔道の力を以て世界を切り開き、切り従え、その結果として万物の霊長の位置にある。また我らのベルン帝国が、大陸を制して覇権を握ったのも、偏^{ひしえ}に魔道の力によるものだ」

そう熱をこめた声で語るアンゼルムが、ふとテレジアを振り向いた。

「無論、他の見解を否定するものではないよ。クラナツハくんの意見も正しい。知によって世界の真理を解き明かす探究も、それによって得られた力の行使も、共に魔道だ。知は

力なり、というやつだな」

「その言葉、誤用してませんか？ 少々即物的すぎる解釈かと」

「いいのだよ、細かいことは」

あつさりと言いつ切るアンゼルムが、再び新入生に向き直る。

「そして、伝統もまた力だ。貴族は魔道の力で代々皇帝陛下に仕え、帝国を支え、民を治めてきたのだから。ああ、平民出の君たちも臆する必要はない。自らの力で新たな家門を興し、栄達の階段を駆け上る——その程度の気概はあるのだろうか？ 私の義父も、その口だった」

新入生の列のそこかしこから、ざわめきが広がっていく。語り手の熱が、徐々に伝染したのだ。

「新入生諸君、大いに学び、大いに鍛え、大いに競い合いたまえ！ この学院は、そのための楽園^{パラダイス}だ!!」

一斉に、拍手が起こった。興奮に顔を赤くして立ち上がった者や、歓声を上げている者も、そこかしこにいる。

だが、昂揚^{こつよう}と喧噪^{けんそう}に巻きこまれない者もいる。その一人であるルネは、困ったように顔をしかめていた。

「ああいう人、ちよつと苦手かも。何だか功利的すぎる気もするし」

「言ってることは間違つてませんよ。入学式でわざわざ煽るべきかどうかは別として。そもそも俺たちからして、ロレーヌ家の再興で『上』を目指してるんですから」

「ううう、それはそうなんだけど——」

と、壇上のテレジアがわざとらしく咳払いする。

「総代、そろそろ時間が押しています」

「おっと、すまない秘書くん。新入生諸君、静粛に——」

「誰が秘書ですか、誰が」

テレジアのツツコミを流しつつ、アンゼラムは不器用なウインクをした。

「これから君たちに、魔道学院の学生として培ってきた成果の一端を披露しよう。楽しんで欲しい」

祝辞（？）を終えたアンゼラムが壇上から下りると、すぐに演台が片付けられた。広々となつた壇上に、今度は三〇人前後の上級生が上がる。

「ではこれより在学生の代表により、新入生歓迎の模範演技を行います」

そう告げたテレジアも、上級生の列に並んだ。

「テレジア姉様、まだ四年生なのに模範演技の代表として選ばれたんだ。さすがだね」

「ほとんどが五年生ですよね。四年生はテレジア様の他に——どうやらあと一人いるようです」

列の反対側に立つ男子学生が、テレジアと同じ白いタイを締めていることに、アルトは目敏く気づいた。ほほ同時に講堂内を照らしていた魔道の灯火が消され、窓のカーテンも閉ざされる。

大講堂が暗がりに沈んだのは、一瞬のことだった。

天井に無数の光点が瞬き、星のように講堂内を照らし出す。まるで、満天の星そのものように。

架空の星辰の下で、壇上にいくつもの炎が灯る。赤、黄、あるいは青。揺らめく炎は次々に人馬へと姿を変えようと、隊伍を組み、行進を始めた。

奇妙な光景だった。

いくら魔道学院の大講堂でも、壇上の舞台の広さには限りがある。当たり前だ。だが炎の騎馬の集団は、無辺の広野を進軍しているようにしか見えない。

騙し絵じみた情景に、新入生たちは息を呑む。

「これって、パレードの出し物かな？」

「いや、おそらく史劇でしょう。主題は……ナンツイヒの会戦か？」

アルトの見立ては、正しかった。騎馬の群れが左右に分かれたかと思いきや、激しくぶつかり合ったのだ。

壇上を駆け回り、打ち合い、目まぐるしく交錯する炎の人馬。ついには舞台から飛び出し、講堂の頭上を戦場として相争う。

圧倒的なスペクタクルに、新入生たちは悲鳴とも歓声ともつかない声を上げていた。

「凄（まじ）い、凄（まじ）いわアルト！」

「確かに、金を取れる見世物ですね」

ルネたちも目を輝かせて、その情景に見入る。

やがて、入り乱れていた炎の人馬が二手に分かれる。互いに隊伍（たいご）を組んで対峙（たいじ）し、一氣（いっき）呵成（かぜい）の突撃に移った。

講堂中の学生が固唾（かたつば）を呑んで、激突の瞬間を見守る。

異変はその時、不意に起こった。

疾走する馬の頭が、騎手を振り落として飛び上がった。そのまま空中を一直線に、正面の新入生の席を目指して突っ走る。

ちょうど、ルネたちの座る一角に。

「え？」

ほとんどの者が、反応できなかった。演出なのか事故なのかも判別できず、ただ馬の暴走を見ていることしかできない。

呆然（ぼうぜん）とする新入生に、迫る熱波が浴びせられる。

「う、うわあ!？」

「きゃあっ!？」

口々に上がる悲鳴。パニックに陥りかけた講堂で、咄嗟（とつさ）に動けたのはただ二人——ルネとアルトだけだった。

「お願い!!」

「お任せあれ!!」

主の声と共に、アルトは席を蹴って立ち上がる。

眼前に迫る炎の馬。術法を唱えている暇はない。全身の魔力を右腕に込め——思いっきり殴りつけた。

「おおおおお!!」

渾身（こんしん）のアッパーカットが炸裂（さくれつ）した。殴り飛ばされた炎の馬は高々と宙を舞い、天井（てんじやう）に叩（たた）きつけられる。

その衝撃で術法が解け、魔道で造られた仮初の星空が消え去った。たとえ術法という形を取らずとも、自身の肉体に魔力を巡らすことで、魔道士は常人の限界を超えた身体能力を軽々と発揮できる。

そのため有力な貴族たちの間では古来より、一族郎党から魔力を用いた近接戦闘に長けた者を選び、自らの身边に置く習わしがあった。平時には従者として、そして有事には護衛として。

それが、騎士。いかなる状況でも身を挺して主たる魔道士を守り抜く、最後の盾。今のアルトの働きは、それに相応しい見事なものだった。だが同時に、その代償もまた大きい。

右腕は酷く焼け焦げて、無惨な火傷を負っている。苦痛に歪んだ顔には、脂汗が浮いていた。

「ぬ……くう——」

「——アルト」

耐えきれず膝をつくアルトの姿に、ルネは声を押し殺す。

一方、天井まで殴り飛ばされた炎の馬だが、まだ終わっていない。空中で反転し、再度の突撃に入った。

アルトが稼いだ時間は、わずか数秒。だがその数秒こそが、生死を分けた。

「やるじゃねえか、餓鬼」

不意にアルトの傍らに立つ、長身瘦軀の人影。テレジアと舞台に立っていたもう一人の四年生だと、アルトは気づく。

眼前に迫った炎の馬に向かって、その四年生は無造作に右腕を突き出し、握り締める。ただそれだけの動作で、馬の動きは完全に停止した。

おそらく念動系の術法だろう。魔道書や詠唱を用いない簡易術法としては、破格の威力である。

「——立てよ不滅、我が騎士よ、その剣を示せ」

ほぼ同時に、壇上のテレジアが魔道書を手に叫んだ。眼鏡越しの射貫くような視線を浴びた途端、炎の馬は真つ二つになり、消失する。

目に見えない何者かに斬られたのだ、そうアルトは直感する。力を失い、グラリと揺れたその体を、ルネが抱き留めた。

「ああ、ご無事で何よりです、ルネ様」

「私の心配なんて今はいいから——顕われ、出でよ」

泣きそうな顔で、ルネは自身の魔道書を手に取る。

「……こいつは」

先ほどの四年生が、それを見て顔をしかめる。

ルネの魔道書は、無惨に傷ついていたのだ。

重厚な装丁の表紙には大きな傷が入っており、頁も半ば近く引きちぎられている。残る頁も大半が破れ、あるいは皺くちゃに折れていた。背表紙は壊れ、綴りも緩み、今にもバラバラに解体しそう。

有り体に言って、書物として死んでいた。

「これが名門貴族、ロレーヌ公爵家サマの今の有り様ってヤツか。惨めなモンだな」

あからさまな侮蔑の言葉も、ルネには届いていない。懸命に傷ついた魔道書の頁をめくり、目的の術法を選ぶ。

「——へいと高き存在、光を司る御方よ、心の御力にて、この者の傷を癒やしたまえ」
回復術法の詠唱。アルトの傷ついた体が、温かく柔らかな光に包まれる。

「ありがとうございます、俺なんかのために」

その一言が、限界だった。アルトはそのまま意識を失った。



突然の混乱の中、傷つき意識を失ったアルトは、大講堂の控え室に運び込まれた。その部屋には、万一の事態に備えて校医の一人が待機しており、臨時の医務室になっていたのである。

部屋の片隅で一人、ルネは椅子の上で両膝を抱える。無言のまま、アルトの寝かされたベッドを見やった。その周囲にはカーテンが二重に張られていて、校医による施療の様子を見ることはできない。

「終わったよ」

カーテンが開かれ、校医がそうルネを呼ぶ。跳ね起きたルネは、アルトの所に急いだ。

「アルト！」

白く清潔なベッドの上に、アルトは寝かされていた。制服の上着とシャツを脱がされた半裸の姿で、傷ついた右腕全体に巻かれた包帯が痛々しい。

だが顔色は青ざめているものの、呼吸は安定している。

「大丈夫でしょうか、先生？」

「もちろんだとも。すでに火傷は完治させた。痕も残らないさ。念のため今日一日安静に

していれば、明日からの授業にも出られるだろう」

「良かったあ」

穏やかな校医の言葉に、ルネはベッドの脇でへたり込んだ。

「今回は特に、応急処置の治療術法が良かったからねえ。熱素の除去に体組織の保護、体内の魔力循環の安定化。ここに担ぎ込まれた時点で彼の容態は安定していたから、私は再治療法に専念できたよ」

一口に回復術法と言っても、その内実は多岐にわたる。突発的な外傷や疾病の発症に対して、適切な術法を選択して行使するのは、たとえ魔道士でも相応の教育や訓練を受けていなければ難しい。

「君がやったのだらう、ルネ・ド・ロレーヌくん。さすがはロレーヌ家の後継者、生命術法の大家だ。大命十家の名は、伊達じゃないな」

「……ありがとうございます」

校医に賞賛されて、ルネは力なく笑った。

大命十家とは、数ある魔道士の家門の中でも、最も古く尊いとされる十の家である。

この地上に魔道をもたらした〈十賢者〉の子孫とされ、各々の家祖が啓示されたという十の命題の探求を、遙か昔から代々続けてきた。それゆえ大命十家の尊称で呼ばれており、

その象徴たる家伝の魔道書も大命十書として尊ばれている。

ロレーヌ家が与えられた命題は、『生命の本質の解明』。所有する魔道書——大命十書の第三書には、人体と生命の秘奥ひおくが記されていた。

そうあるべき、本来の姿ならば。

「私も魔道医の端くれとしてロレーヌ家には敬意を抱いてたし、恩恵も受けていた。実に惜しいよ。残念だ」

「……………」

半壊した魔道書を痛まじげに見ながら、校医は言った。ルネは何も言えないまま、押し黙ることしかできない。

気まずい沈黙は、不意の大声で破られた。

「ルネちゃあああん!!」

控え室の扉を蹴破る勢いで、赤髪に眼鏡の女学生が駆け込んできたのである。

「テ、テレジア姉様?」

驚いて棒立ちになったルネを、テレジアは思いつきり抱きしめた。

「ごめんねえ! せっかくの入学式であんな危ない目に遭わせちゃって! 大丈夫!? 怪けしてない!? お姉ちゃん、心配で心配で——」

「あ、あうあうあう」

激しく揺さぶられ振り回され、ルネは目を白黒させた。そんな従姉妹いとこ同士の交歓に、校

医がコホンと咳せき払いする。

「落ち着きたまえ、クラナツハくん。患者が休んでいるのだよ」

「あ……すみません、先生」

正気に戻ったテレジアが、気まずそうに笑いながらルネから離れた。

(変わらないなあ、テレジア姉様)

乱れた制服を直しながら、ルネは生温かくテレジアを見やった。自分のことを大切にしてくれているのは分かるし嬉しいのだが、その溺愛うれっぷりには正直、ついていけなくなることもある。

「では、私も医療棟に戻らせてもらうよ。他にも患者がいるからね。霊薬を置いておくら、彼が目覚めたら飲ませるように。もし容態が悪化したら、すぐに呼びなさい」

「本当にありがとうございます」

深々と頭を下げ、ルネは校医を見送った。

校医が立ち去り、部屋にはルネたち三人が残された。とは言え、まだアルトが目覚める

気配はない。

「では、あらためまして——お久しぶりです、テレジア姉様」

ルネは制服のスカートの裾をつまみ上げて、上品に一礼した。それを見たテレジアが、優しく笑う。

「本当に、久しぶりね。確か私の入学直前に会ったきりだったから、三年ぶりくらいかしら。あの時は、まだまだ子供だと思ってたのに——」

伸ばされたテレジアの手が、ルネの頬にそっと触れた。

「いつの間にか、こんなに大きくなっちゃって。もうすっかり、一人前の淑女ね」

そう言いながら、テレジアはルネの頬を優しく撫でた。ひんやりとした手の平の心地よい感触に、ルネは目を細める。

「……テレジア姉様みたいにお綺麗な方からそんなこと言われても、かえって恥ずかしいですよ」

「ありがとう、ルネちゃん。お世辞でも嬉しいわ」

「そんな、私は本気で——」

つい大声を上げそうになり、ルネはハッと口を押さえる。そんな彼女の仕草に、テレジアはクスクスと笑っていた。

「もう、本当に可愛いわね、ルネちゃん」

「か、からかわないでください」

顔を赤くしたルネが、話題を変える。

「そ、それで、入学式はどうなりました？」

「元々、あの模範演技で終わりだったから。新入生は予定通り、校庭での園遊会に移ったわ。大講堂では、事故の検証中」

「そうですか」

「アルトくんの容態も落ち着いてるみたいだし、ルネちゃんだけでも園遊会に出たら？」

「私を守ってアルトが傷ついたのに、その彼を置いては行けません」

「相変わらず仲が良いわね。お姉ちゃん、ちよつと妬げちゃうかも」

そう冗談めかして、テレジアはクスリと笑った。

「本当に立派になったわね、二人とも。あんなことがあった後なのに」

「立派なんかじゃ、ありませんよ。私には、何もできませんでしたから」

七年前、ルネの父であるロタール・ド・ロレーヌ公爵は、帝都の自邸で暗殺された。家伝の魔道書まで修復不能の損傷を受けるといって、最悪の形で。

ロレーヌ家が培ってきた魔道の知識と秘術のうち、一人娘のルネが受け継いだのは、

その一部でしかなかった。

当主と魔道書を失い、ロレーヌ家は失墜した。所領や財産の大半は、独立した分家の手に渡ってしまう。まだ幼かったルネに、それを止める術はなかった。

「クラナツハのお祖父様と伯父様には、本当に感謝しています。お二人のお力添えがなければ、私はこの学院に入ることさえできませんでしたから。これでようやく、ロレーヌ家再興の一步を踏み出せます」

そう言いながらルネは、手にした魔道書をぎゅっと握り締めた。深く傷ついたその表情を、テレジアは痛ましそうに見つめる。

「御家再興ね。まずはその魔道書から、何とかしないと——あら？」

ルネの手にした魔道書をながめたテレジアは、あることに気づいて目を瞬かせた。

「その魔道書って、原本じゃないのね。写本なんだ」

魔道士の家門にとつて、家伝の力ある魔道書とは、当主が所持する一冊きりのもの——というわけではない。一族の後継者や子弟は、魔道書の『原本』の内容を書き写した『写本』を所持することで、家伝の書の力を借り受けることができるのだ。

テレジアの持つクラナツハ家の魔道書も、父のクラナツハ伯爵が持つ原本から写し取られた、力ある写本だ。

「ロタール叔父様はもう亡くなられたわけだし、原本もルネちゃんが持つてるのだと思っただけ」

「事情が事情ですから、原本は安全な場所に保管しています。この写本は、そこから特殊な方法で写し取りました」

「なるほど。ちょっと見せてもらっていいかしら？」

「どうぞ」

テレジアの様子が変わった。貴族の子女ではなく、魔道士としての目で、魔道書の様子を検分する。

「興味深いわね。原本の状態を損傷具合まで含めて再現することで、原本と写本の同調を深めている。裏を返せば、そうでもしないと写本を力ある書として機能させられないってことね」

「姉様の、お見立て通りです」

テレジアから魔道書を返され、ルネはぐっと握り拳をつくった。

「だからこそ私の手でこの魔道書を、完全な形で修復してみせます。それが私の目指す、ロレーヌ家の再興です」

そう勇ましく宣言したルネだが、不意にガクリと肩を落とす。

「どうしたの、ルネちゃん？」

「言うは易く行うは難し、ですから。今までロレーヌ家のご先祖様が、代々積み上げてきた探究とその成果を、私一人で再現するようなものですし」

「あー、そうよねえ」

ルネの吐いた弱音に、テレジアはさもありませんとうなずいた。

「手っ取り早いのは、奪われた魔道書の頁を取り戻すことだけど——」

「……七年経っても、犯人の目星さえついていません」

「それならロレーヌ家の蔵書と突き合せて、魔道書の欠落した記述や術法の当たりをつけるとか——」

「……父様が亡くなった後、所領や財産と一緒に、めぼしい書物も分家に持って行かれて散逸しちゃいました」

そう答える度に、ルネは小さくなっていった。すっかり縮こまった姿を見て、テレジアはこほんと咳払いをする。

「だからと言って、諦めるつもりはないんでしょう？」

「もちろんです！ 何千マイルの道のりでも、まずは最初の一步を踏み出すところから始めないといけませんから」

そうテレジアが水を向けると、ルネは勢いよく顔を上げた。

落ち込むのは早い立ち直るのも早いのが、ルネ・ド・ロレーヌという少女なのだ。それが良いことなのか悪いことなのかは分からない。

「それにどんなに遠い道だとしても、アルトと一緒に歩いてくれますから。それだけで、私は頑張れちゃいます」

「その意気、その意気。ところで——」

満足そうにうなずいたテレジアの眼鏡が、不意に怪しく光る。

「——ルネちゃんがよければ、もう少し簡単に身を立てる方法もあるんだけどなあ」

「何ですか、それ？」

あからさまな猫なで声に、ルネは警戒した。

「ねえルネちゃん、うちの子になるつもりはない？」

「はあ？」

「今までクラナツハ家として、ルネちゃんにできることは限られていたわ。縁戚同士とは言っても、本領と東部領で離れている以上、色々と面倒なしながらみもあるし。でもルネちゃんが正式にクラナツハ家の一員になってくれたら、ちゃんと守ってあげられるの。祖父も父も、それを望んで……」

テレジアの聲が、段々と尻切れトンボに消えていく。ルネの露骨に不満そうな半目に氣づいたのだ。

「つまり、私にクラナツハ家の養子になれってことですか？」

「そうだけど、ダメかな？」

「ダメに決まってます！」

憤然と、ルネは即答する。

「大体、私がクラナツハ家の養子になるってことは、ロレーヌ家の魔道を捨てるってことじゃないですか」

「それは、そうなるかもしれないけど……」

ルネに指摘され、テレジアは露骨に目を逸らした。

クラナツハ家の魔道は、死者の霊や魂魄こゝろを扱う降霊術法だ。人体や生命について探究してきたロレーヌ家とは、真逆の家なのである。

「せっかくルネちゃんと本当の姉妹になれると思ったのに。よよよよ——」

「下手な泣き真似まねはやめてください！」

盛大にため息をついたルネが、そっと胸元に手を当てる。真つ直まぐすにテレジアを見つめて、語りかけた。

「姉様、父が亡くなった後で、ほとんどの家臣はロレーヌ家を離れました。でも、残ってくれた人たちもいるんです」

「アルトくんや、彼の御両親みたいには？」

「はい。私は今日まで、そういう人たちに育ててもらいました。苦しい生活の中で、みんな私にロレーヌ家の再興を託してくれたんです。それを今さら、なかったことにはできません」

そう真摯に訴えるルネを、テレジアはまじまじと見つめた。しばしの後、優しげな微笑ほほえみみを浮かべる。

「どうやら、私の方が間違ってたみたいね」

「姉様、その——」

「分かったわ。もうこれ以上、無粋なことは言わないから」

そう言ったテレジアは、ふとベッドのアルトを意味深に見やった。

「だ、そうよ。これからも苦勞しそうね、アルトくん。騎士の本懐でしょうけど」

「え？」

テレジアの思わせぶりな様子に、ルネもベッドをのぞきこんだ。まだ意識を失っていると思っていたアルトだが、目元や口元がピクピク痙攣けいれんしている。

「……起きてたんだ、アルト。いつから？」

「つい先ほど、テレジア様が入室された際の騒ぎで目が覚めました」

ルネの声音に不穏なものを感じ取り、アルトは正直に答える。ベッドの上で、上体を起こした。

「けっこう前からじゃない。なんで目が覚めたって言うてくれなかったの？ 私、すごく

心配してたんだよ」

「お二人の話を邪魔するのも憚はばかられましたし。それにルネ様の本心をうかがえる、良い機会だと——あ痛っ!？」

ベッドの枕を握り締めたルネが、ぼかぼかとアルトを枕で殴る。

「盗み聞きしてたんだ。バカバカ——アルトのバカ」

「痛い痛い、お許しくださいルネ様……って、本当に痛い!？」

幼馴染おきななじ同士ななじの犬も食わないなんとやらに、テレジアは吹き出した。

「何をやってるの。本当に仲良しよね、二人とも」

続きは、9月19日発売のファンタジア文庫で！

©Naoto Okuro, Eiri Shirai 2020